

10年に一度の好観測条件 **2015年12月14日-15日** ふたご座流星群

ふたご座流星群は毎年12月中旬に見られる流星群で、1月のしぶんぎ座流星群、8月のペルセウス座流星群と共に「三大流星群」と呼ばれます。

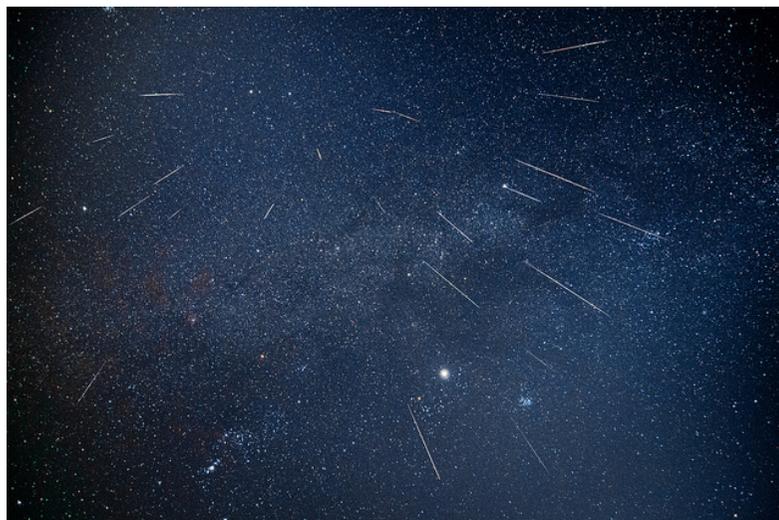
今年（2015年）は、**12月14日20時頃から見頃を迎え、極大は15日の午前3時頃**と考えられます。今年には12月11日に新月となるので、夜空が暗く、10年に一度の好条件となります。

暗いところでは、**1時間あたり40から50の流星**が、ふたご座の方向付近から降り注いでくるのが観測できることでしょう。13日の夜も期待できます。
(およそ12日から17日まで)

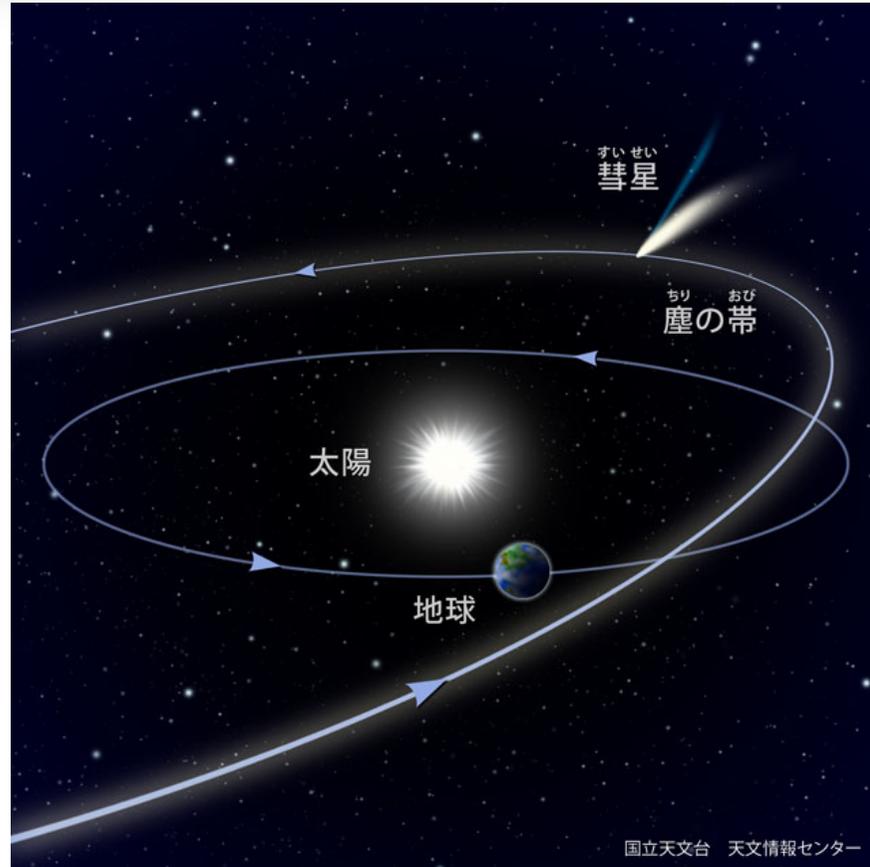


観察するときには放射点の方向にはあまりこだわらず、できるだけ空が広く見渡せる場所を選んで、空の広い範囲に注意を向けるとよい。空をより広く見渡すほうが、より多くの流星を捉えられます。

放射点近くに出現する流星は、こちらに向かって飛んでいるために短い軌跡の流星が多く、放射点から離れた方向では、流星の軌跡を横から見ることになるために長い軌跡の流星が多くなります。



流星群の由来：彗星の通り道に地球が接近するから



流星は、直径1ミリメートルから数センチメートル程度のチリの粒が地球の大気に飛び込んできて大気と激しく衝突し、高温になって光を放つ現象です。

ハレー彗星など、太陽を周回するいくつかの大きな彗星は、その軌道上にチリの粒を軌道上に放出して残してゆきます。彗星の軌道と地球の軌道が交差している場合、地球がその位置にさしかかると、チリの粒が多く地球に引き寄せられるので、毎年特定の時期に特定の流星群が出現することになります。

地球から見ると、飛び込んでくるチリの粒は、星空のある一点から放射状に飛び出すように見えます。流星が飛び出す中心となる点を「放射点」と呼び、一般には、放射点のある星座の名前をとって「〇〇座流星群」と呼ばれます。ふたご座やペルセウス座から星がやってきているわけではありません。

主な流星群

じぶんぎ座流星群	: 1月はじめ	: 母天体諸説あり
ペルセウス座流星群	: 8月中旬	: 母天体はスウィフト・タートル彗星
オリオン座流星群	: 10月中旬から下旬	: 母天体はハレー彗星
しし座流星群	: 11月中旬	: 母天体はテンペル・タートル彗星
ふたご座流星群	: 12月中旬	: 母天体諸説あり

流星の出現数の予測は難しく、よく外れます。

一般に、流星群の放射点が地平線付近にあるときには、チリが大気にななめから飛び込んでくるためにチリの数は少なく、流星はほとんど出現しません。流星群の活動の活発さが変わらないと仮定すると、放射点の高度が高くなるにしたがって流星の出現数は多くなります。